

ハンガリーの越境作家の経験と作品 その社会的意味

「アゴタ・クリストフを中心に」

名古屋市立大学大学院人間文化研究科

(やまもと・あきよ)

山本明代

昨年は、一九五六年にハンガリーにおいて共産主義体制に抗議する民衆蜂起が起こったハンガリー革命の五〇周年にあたった。日本でも記念シンポジウム『ハンガリー一九五六』

から五〇年（於：法政大学）が開催され、A・アンダーソンの名著『ハンガリー一九五六』の新訳書などが刊行された。本国のハンガリーにおいては、革命を回顧・記念する式典や催しが相次ぎ、新資料や回想録などに基づいて一九五六年革命を再検討する研究も多数発表された。

ハンガリーの文学界でも、亡命したハンガリー系作家を招聘する「亡命者プログラム」の実施や国外で活躍するハンガリー系作家を紹介する『国境なき文学―国境を越えたハンガリー文学』の出版など一九五六年の革命を記念する事業が行われた。同書は、西欧諸国においてハンガリー語以外の各言語で著作活動を行っている作家とハンガリーに隣接するスロヴァキアやルーマニアに居住する

ハンガリー語作家二五名を作品やエッセイ、プロフィールと著書目録、仕事場での肖像写真によって紹介したものである。

社会主義時代のハンガリーにおいても、国境外のハンガリー語作家は、ハンガリー科学アカデミーから出版された『ハンガリー文学史・一九四五年から一九七五年』全四巻の最後の巻でも取り上げられているように、注目される存在であったが、東欧の体制変革が起こった一九八九年以降に新たな状況が生まれた。ハンガリー出身の移民・亡命者が国外からハンガリーの政治・経済・文化・社会の多様な側面に大きな影響力を与えるようになったのである。著作・出版活動についてみると、とりわけ、第一次世界大戦の敗北によって国土を分割することとなった一九一八年のトリアノン条約への批判とそれによってスロヴァキアやルーマニアなどの周辺諸国に残ったハンガリー系住民の処遇をめぐる批判が盛んに議

論されるようになった。この変化が周辺諸国のハンガリー系住民と欧米諸国のハンガリー系をつなぐ新たな基盤を形作ることになり、ハンガリーアン・ディアスポラの存在を顕在化させることになった。そして、政治的な議論に留まらず、文学界においても周辺諸国のハンガリー語作家と欧米で著作活動を行っているハンガリー系作家とを同時に論じるハンガリー国民文学の領域の拡大と枠組みの再編が起こった。

本稿では、前述した「亡命者プログラム」と『国境なき文学』の両方において重要な作家として位置づけられている『悪童日記』のベストセラ作家アゴタ・クリストフを中心に、二〇〇二年にノーベル文学賞を受賞したハンガリーの作家ケルテース・イムレ（ハンガリーでは、日本と同様に名前の表記を姓・名の順で表す）を比較しながら、国境を越えて活動する越境作家が国民や国家というナショナルな枠組みをいかに捉えているのか、また、ハンガリーにおける国民意識が作家の評価といかに関わっているのかを考えてみたい。そして、これを通して、作家の越境的な経験の中に内包される混濁性の内実とその社会的な意味合いの分析を試みたい。各作家の作品についても多少紹介するが、筆者が歴史研究者である

ことから、作品自体の内容分析や評価にまでは踏みこまないことを予め断っておきたい。

アゴタ・クリストフの 経験と作品

はじめに、アゴタ・クリストフの経歴と作品について見てみよう。一九八六年に『悪童日記(原語では大ノート)』をフランス語で発表し、続く『ふたりの証拠』と『第三の嘘』の三部作で世界的なベストセラー作家となったアゴタ・クリストフも一九五六年革命後に国外に脱出した約二〇万人の亡命者の一人である。『悪童日記』は、日本語版が一九九〇年に出版されているが、これまでに三五の言語に翻訳されている。

クリストフは、一九三五年にハンガリー西部のチクヴァアードという小さな村で生まれ、小学校教師の父親の影響で、子どもの頃から活字を読み、本に親しむことを覚えた。ハンガリーの小スターリンと呼ばれたラークシ政権下、父親が投獄されたことから、不遇な少女時代を送ったのち、一九五六年の革命直後、二一歳のときに、夫とともに赤ん坊を連れて国境を越え、スイス西部のフランス語圏のヌーシャテル市近郊に亡

命した。そこで、五年間時計工場の労働者として働き、離婚と再婚ののち、授かった二人の子どもとフランス語で会話をするようになり、子どもの小学校入学を機に、フランス語の読み書きの勉強を始めた。

少女の頃から詩や寸劇の脚本を書いていたが、一九六〇年代の終わりになると、家事や育児の合間に書き溜めたハンガリー語の詩を当時パリで発行されていたハンガリー語新聞『文学新聞』や雑誌『ハンガリー人の仕事場』に寄稿するようになる。同時に、習得したフランス語を使って、地元の劇団に脚本を提供しつつ、ハンガリーでの子ども時代の体験をつづった小説『悪童日記』を完成させた。スイスでの亡命生活の孤独と焦燥感、ハンガリーからの亡命者仲間四人が自死した体験は小説『昨日』(一九九五年)に著されている。この作品は、イタリヤ人監督シルヴィオ・ソルディーニによって『風の痛み』という題名で映画化もされている。

アゴタ・クリストフの 言語世界

アゴタ・クリストフは、二〇〇四年に自伝『文盲』を発表し、生い立ちや作家になった経緯を著している。

作家の自伝としては衝撃的な題名は、幼い頃から本を読むことが好きで、詩も書いていたクリストフが自らの意思とは関わりなく、亡命によってスイスのフランス語圏に移り住むことになり、そこで人々が使うフランス語の読み書きができない「文盲」になった経験を象徴的に表現している。寄宿舎で暮らした少女時代の家族との別離の悲しさと亡命生活の孤独の中で、クリストフに残されていたのは、「書く」ことであつた。あるインタビュの中で、書くことよつて生き延びてきたとも語っている。「書く」ことと「読む」こと、言語へのこだわりを綴つたこの自伝を手がかりに、クリストフの言語世界とナショナルな意識を探ってみよう。

ハンガリーの小村で生まれ育つたクリストフにとって、まずはハンガリー語が唯一の言語だつた。村はずれには異なる言葉を話すロマが住んでいたが、その言葉は、弟ティラには理解できないように兄ヤノと話すために発明した言葉と同様に、適当に作られた言葉だとクリストフはみなしていた。村の居酒屋で他の者が使用しないようロマ用のグラスに印がつけられていたように、村の共同体から排除されていたロマの言葉は、本物の言語ではないと考へていたのだ。九歳のとき、クリストフはオース

越境の文学

第1部

トリアとの国境の町ケーセグに家族とともに移り、ドイツ語を話す住民と出会った。彼らは、ロマとは異なり、服装も社会的地位もハンガリー語を話す者と変わりはなかったが、その言葉は、クリストフにはまったく理解できないものだった。やがて、第二次世界大戦の開戦によって、ドイツ語は占領者の言語となった。

第二次世界大戦中にドイツの同盟国となり、極右政党矢十字が支配したハンガリーを「解放」したのが、ソ連の赤軍だった。戦後、ロシア語が学校で義務化され、急ごしらえでロシア語教師が養成されるが、教える側も学ぶ側も同様にロシア語学習への意欲は皆無であり、クリストフもこの言語を習得することはなかった。

一九五六年革命後の亡命先スイスでは未知の言語フランス語を「征服」するための闘いが始まった。クリストフは、三〇年以上フランス語を話し、二〇年前から書いているが、話す際には語法を間違え、書くためには辞書を使って、ハンガリー語の二倍も時間がかることを告白している。幼い頃から言語に対する鋭敏な感覚を有していたクリストフは、言語を通して、ハンガリーの各時代における他国による支配という歴史的経験を記憶し、自らの中に積み重ねてきた。その経験によって形作られた

言語的アイデンティティは、社会的に排除されていたロマの言語によって、かすかに意識され始めたものの、ドイツ語とロシア語という二つの征服者の言語の強制、敵の言語の出現によって、母語は、国民としての意識を伴うナショナルな言語として認識されるようになった。さらに、亡命後に出会ったフランス語は、クリストフに習熟への闘いを強いなければならず、彼女のハンガリー語を日々侵食しつつあった。そのため、クリストフにとって、フランス語は第三の敵の言語、それまで出会った他のどんな言語よりもさらに強力な敵の言語として、彼女の言語的アイデンティティを激しく揺さぶっている。

クリストフとケルテース

三部作の翻訳がいち早く発表され、前述したように、国外のハンガリー系作家の代表として、ハンガリーにおいても高い評価を得ているクリストフに対して、ケルテースへの評価は、現在もなお、欧米に比べて高いものではない。ここでは、作品に表現されている歴史認識を比較し、その原因を探ってみたい。

二〇〇二年にハンガリーの作家ケルテース・イムレがノーベル文学賞を受賞したことは、欧米諸国だけではなく、ハンガリーにおいても驚きをもって迎えられた。マイナー言語の作家がノーベル文学賞を受賞することは度々あるが、当時英語圏でのケルテースの知名度はほとんどなく、ハンガリーにおいては数々の文学賞を受賞していたが、必ずしも評価の高い作家ではなかった。『悪童日記』

ケルテースは、一九二九年にハンガリーの首都ブダペシュトでユダヤ系家族の下に生まれた。第二次世界大戦下一五歳の時に、アウシュビッツの強制収容所に、のちにブーヘンヴァルト収容所にも送られるが、過酷な迫害を生き延び、戦争終結後、ハンガリーに戻る。工場労働者として働いたのち、ミュージカルの脚本の執筆、ニーチェやフロイトの翻訳を始め、ブダペシュトで発行されていた新聞『明瞭』のジャーナリストとなるが、その新聞が統制を受けると解雇され、兵役を務めたのち、翻訳家として本格的な活動を始める。ホフマンスタールやカネッティ、シュニツラーなどのドイツ語文学やヴァイトゲンシュタインら思想家の翻訳を続々と発表した。一九六〇年からホロコーストの体験を著した自伝的小説『運命ではなく』の執筆を始めるが、出版にこぎつけたのは、一九七五年のことであり、当時はほとん

ど反響がないままに終わった。二年後の一九七七年に『痕跡を求めて』、一九八八年には『挫折』、一九九〇年に『生まれなかつた子のためのカデイツシュ』を発表している。

ケルテースは、現在、ブダペシュトとドイツのベルリンの両方を活動拠点としているが、小説はハンガリー語で書き、ハンガリーの出版社に作品を提供している。ケルテースの作品には、クリストフに見られるような言語的な越境経験が表現されていないが、比較文学研究者のゼペトネクは、ケルテースがハンガリー人とユダヤ人の仲介者であることによつて、その作品世界において広く東中欧諸国の人々の経験を普遍化していると評価している。スイスの小都市で禁欲的に暮らし、年齢を重ねてハンガリーと子ども時代への郷愁が増していることを隠さないクリストフに対して、コスモポリタンとして世界都市ベルリンでも暮らし、ドイツやアメリカのメディアに対して政治的な発言を続けているケルテースは、いかにも越境的な作家の代表にもみえる。しかし、ハンガリー国内でのケルテースへの評価が高まらないのはなぜだろうか。

つた行為であり、それを解放したのが赤軍であると解釈されていたため、ユダヤ人迫害の問題は体制の正当性の根拠とされることはあつても、国民の加害の問題として認識されることはなかつた。東欧の体制変革後に支配的になつた風潮は、新たに設置された恐怖政治博物館に象徴されるように、ホロコーストと社会主義時代の政治的抑圧を全体主義の時代として一括して論じ、被害者としての「ハンガリー国民」を救出し、ナシヨナリズムの強化へと転化させる傾向だつた。

このような中、EUの東方拡大政策によつて後押しされたケルテースのノーベル賞受賞は、ハンガリーにおいて第二次世界大戦下の忘却したいホロコーストの記憶を蘇らせ、国民の加害の問題を問い直すものであり、ハンガリー社会の底流で流れ続けている反ユダヤ主義を敏感に刺激することにもなつた。加えて、ケルテースが共産主義時代の体制協力者問題の存在を指摘し、イラク戦争に対するドイツ政府の政策を批判しアメリカ政府支持を声高に訴えていること、トランシルヴァニア地方の大学のハンガリー語教育に関してルーマニア政府を批判するなど政治的な発言を続けていることもハンガリー社会において、内側にささつた棘として認

識されることにつながっている。他方、一九五六年革命の亡命者として象徴的な存在であるクリストフは、第二次世界大戦下の占領者ドイツ、引き続き抑圧者ソ連への批判者として、両者を外部の敵としてハンガリー国民の歴史認識を愛国的に慰撫し、ハンガリーの国民文学の枠組みに安定的に収まる存在である。この両者の立脚点と評価の相違から、越境文学の中のハイブリッド性に絡みつくナシヨナルな枠組みの強固さを見る事ができるのではないだろうか。

- Kaiser Ottó, *Határúton iradalom: Magyar iradalom a határon túl*, Alexandrakádi, Budapest, 2006.
 - Péterz Andras, "Agota Kristof, a svájci magyar frankofon regényíró", *Élet és Irodalom*, 26.szám, július 30., 2006.
 - Tótszy de Zepetnek, Steven, "Imre Kertész's Nobel Prize, Public Discourse, and theMedia", *CLCWeb: Comparative Literature and Culture*, 7, 4 (2005), (<http://clwebjournal.lib.purdue.edu/clweb05-4/totszy05.html>)
 - アゴタ・クリストフ著、堀茂樹訳『文盲—アゴタ・クリストフ自伝』白水社、二〇〇六年。
 - ケルテース・イムレ著、岩崎悦子訳『運命ではなく』国書刊行会、二〇〇三年。
- * 小稿は科学研究費補助金基盤研究B「越境する文学の総合的研究」(平成一七—一九年度)の成果の一部である。